花開くモダニズム

芦屋市が誕生したのは、昭和15年のことです。しかし、前身の武庫郡精道村と呼ばれた時代から、芦屋の風土はモダンな香りにつつまれて、ここにモダニズム文化が花開いていたのです。

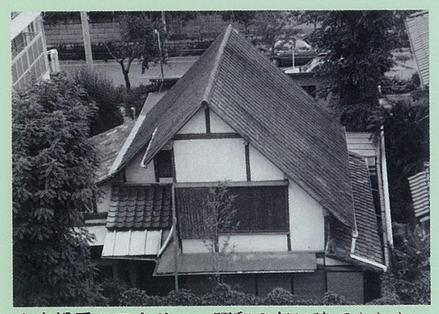
大正８年、わが国においても都市計画法が公布され、1920年代から30年代へと続くこの時代、東京、大阪、横浜、神戸など６大都市が出現し、ここに今日の社会の原型を形成するモダンな都市文化が姿を現しました。大正14年、市域を拡張し、人口でも東京を抜きさって、わが国第一の大都会となった大阪。そして、外国人居留地の都市として、ハイカラな異文化流入の港湾都市として発展をとげる神戸。この２大都市をひかえ、その中間に位置するという地の利に恵まれた芦屋は、大阪・神戸両都市のモダン文化交流の交差点。美術、写真、ファッション、建築、文学などの分野で、確かにモダニズムの足音を聞くことができます。

小出楢重「横たわる裸女Ａ」 1928年 49.2×67.5 油彩 布

美　術

近代美術史上、裸婦像の第一人者と呼ばれ、晩年、芦屋のアトリエから、裸婦像をはじめ静物・風景など数々の傑作を生み出した小出楢重。12歳から芦屋に住み、後に「近代日本が生んだ最も俊敏な知性の芸術家」といわれた長谷川三郎。戦後、芦屋に誕生し、世界的な影響力を持った日本唯一のグループ「具体」の指導者吉原治良。具象絵画、あるいは抽象絵画、そして、前衛芸術とそれぞれ日本を代表する画家たちが、この芦屋の地と結びついていることを確かめておきたい。

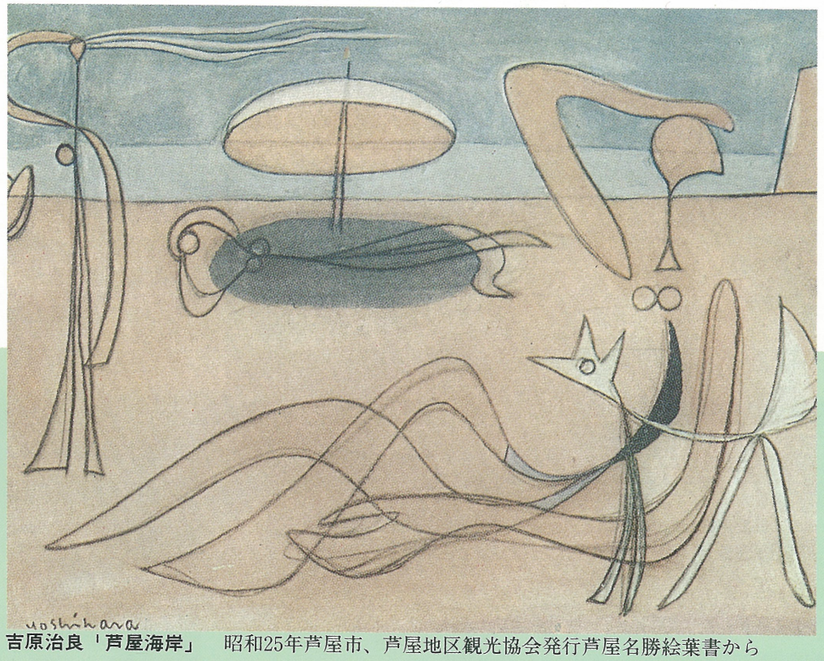
小出楢重「枯木のある風景」 1930年 72.8×90.8 油彩 布
小出楢重の絶筆。現在川西町の市立体育館青少年センター付近から阪神電車方面を望んだ風景。



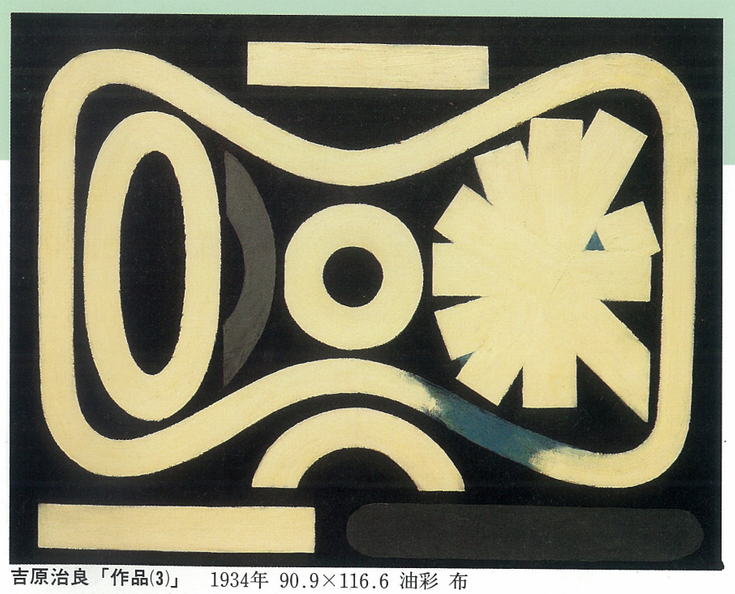
小出楢重のアトリエ　昭和３年に建てられた三角屋根のアトリエ(木造)。昭和62年夏まで川西町にあった。

制作中の小出楢重　昭和３年川西町のアトリエで、制作中の作品は「周秋蘭立像」。

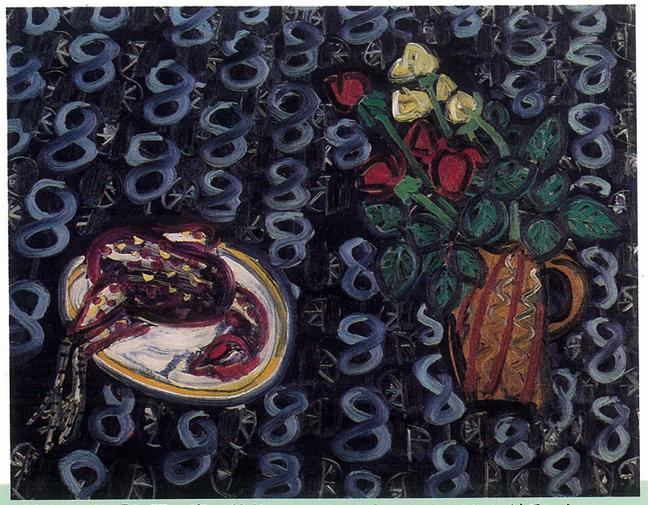
小出楢重「芦屋風景」 1929年 59.5×72.0 油彩 布



吉原治良「芦屋海岸」　昭和25年芦屋市、芦屋地区観光協会発行芦屋名勝絵葉書から



吉原治良「作品(3)」　1934年 90.9×116.6 油彩 布



長谷川三郎「無題―青の静物―」　1934年 79.0×98.5 油彩 布

大石輝一「六麓荘風景(A)」　1930年 61.0×91.0 油彩 布

大石輝一「打出風景(A)」　1929年 37.8×45.5 油彩 布

建　築

芦屋に現在もそのモダンな姿をとどめる「旧山邑邸」。帝国ホテルなどの代表作で知られるアメリカの建築家フランク・ロイド・ライトの設計によるこの「旧山邑邸」で、どんなモダンな生活が繰り広げられていたのだろうか。ライトの残した数少ない貴重な作例が、今も芦屋にひっそりと眠っています。ここには、紛れもなく、日本モダニズムの最も優れた足跡が、一外国人の手によってもたらされたそのわざの面影が刻印されています。

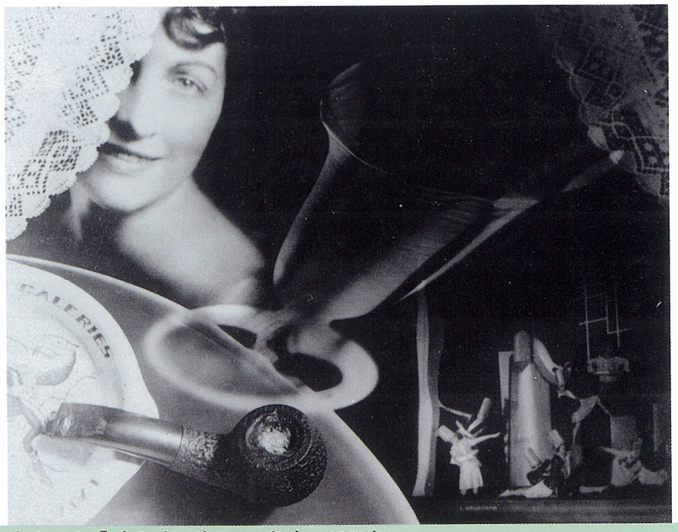
旧山邑邸玄関

4階食堂の天井　幾何学的な装飾が施され、天井まわりには自然光を取り入れる工夫がなされている。

和室の西側にある廊下
日本的な縁側を洋風に表現した連続窓になっている。

写　真

ニューヨーク、パリでの滞在を終えて帰国、昭和4年に前田町にパリのアトリエをまねた家を建てて住んだ中山岩太。そして芦屋でモダンな写真材料店を始め、「シルクハット」などの代表作を生み出すハナヤ勘兵衛。彼らを中心に「芦屋カメラクラブ」が創立され、ニューヨークやパリにも先行して、先駆的な作品がいくつも世に出されました。これら新興写真の拠点として、彼らの作品が、今、大きな注目を集めています。



中山岩太「パイプとグラスと舞台」1932年

ハナヤ勘兵衛「ナンデェ！」　1935年

田中千代「パジャマドレス」　1932年

ファッション

かつての皇后さまのデザイナー、ファッション界の草分け田中千代は、昭和12年、現在の神戸岡本（後芦屋市大原町に移転）に洋裁研究所を開設しました。洋風文化の最も華麗な具体例として、洋裁・洋服の世界がクローズアップされてくる。今見ても斬新な感覚の田中千代の「パジャマドレス」。小磯良平や吉原治良、さらには中山岩太とも交流があったモダンガール田中千代の活動は、芦屋の地を出発点として、世界にはばたく。

近代文学

農村から住宅地へ、移りゆく精道村時代の芦屋の情景は、近代文学の名作のなかに生きています。

星野天知・児玉多歌緒・柳澤健・徳田秋声・山口誓子・吉沢独陽・宇野浩二・与謝野晶子・谷崎潤一郎・富田砕花・高浜年尾など多くの著名な文人が、芦屋を舞台にすぐれた作品を残しています。

大正初期の芦屋川風景

「河原も道路も蒼白い月影を浴びて真白にかがやいていた。対岸の黒い松原蔭に、灯影がちらほら見えた。道路傍には松の生い茂った崖が際限もなく続いていた…」

近代文学に最初にえがかれた芦屋。

徳田秋声『蒼白い月』〈大正９年〉

児玉多歌緒スケッチブック
大正時代の中ごろ、芦屋に住んだ画家であり、歌人の児玉多歌緒は、芦屋の美しい風景や、いきいきとした子どもたちの姿を『海郷抄』などのスケッチブックに残している。

昭和初期の芦屋浜風景

昭和初期、芦屋松浜町の歌人丹羽安喜子邸を訪れた与謝野晶子が、芦屋浜で遠くふるさとの堺を望んでよんだ歌

ふるさとの和泉に暗き雲湧きて
芦屋に見るは紀の国の山

二大文豪ゆかりの地

宮川町の富田砕花旧居は、奇しくも谷崎潤一郎も住んだゆかりの地として往時の面影を伝えています。

谷崎潤一郎は、松子夫人と昭和９年この家に移り、『現代語訳源氏物語』・『猫と庄造と二人のをんな』などの名作を執筆しました。11年秋、神戸住吉に転居し、16年秋から芦屋を舞台にした『細雪』を書きはじめました。

「兵庫県文化の父」といわれた富田砕花は、大正時代初期から芦屋に住み、ホイットマン訳詩集『草の葉』、カーペンター『民主主義の方へ』などを世に送り、民衆詩派の代表的詩人として活躍しました。昭和13年マチ夫人と結婚、谷崎潤一郎のあとへ居住、59年10月、93歳で亡くなるまで、兵庫県を舞台に大きな文化的業績を残しました。

谷崎潤一郎

谷崎潤一郎　遺品

谷崎潤一郎著『夢喰ふ虫』1929年
装丁　小出楢重

富田砕花　作品

富田砕花旧居（宮川町）

富田砕花